低学年複式授業における異年齢学習交流の実践

市川　哲哉

日頃から複式学級という形態を利用した授業を模索している。複式学級の特徴の少人数・異学年を利用し，単式学級にはない複式学級特有の授業の展開をめざしている。それの一つの答えが「異年齢の学習交流」を取り入れることだと考えている。昨年，鹿児島大学教育学部附属小学校と，フィンランドの複式のヨキクンナンコール小学校を教育視察する機会を得た。両校複式学級の授業を参観し，そこで行われている複式特有の工夫を本校の複式授業の実践研究に活かしていきたいと考えた。またその参観や実践の参考にすることで本校複式教育に何か示唆が見えてくるものと考えるのである。

キーワード：異年齢の学習交流，複式学級，上学年，下学年

１．研究目的

和歌山県内をみると，学校統廃合が各地で進み，そこには少人数がゆえに仕方なく複式学級になっているという，複式学級へのネガティブなイメージを抱かされることが多い。特に普段の授業ということになると，「教師のかかわりが約半分になる」「子どもたちが授業を進める分進度が遅れる」「授業の準備等教師の負担が増える」などイメージではなく実際に単式学級より困難な部分がある。

しかしながら，近年のPISA調査の結果からは，カナダ，フィンランドなど少人数・複式・共同学習を導入している諸国の「学力」が比較的高い傾向にあることが分かる。そのことから「複式学級には秘められた可能性があるのではないか。」と推測する。複式学級には，二つの学年の児童が同じ教室で学ぶという学習形態がある。教師はこの形態が存在するからこそ，同時に二学年の児童に深い学びを提供する努力，教科の単元構成や１時間１時間の授業，「わたり」や「ずらし」など指導や支援を工夫するのである。これに対し，子ども達も自分と同じ学年の仲間だけでなく１学年上（または１学年下）の仲間と同一空間で学び合う。単学年と異なり，子どもの間で相互作用が日常的に働くのである。

子どもたちの異年齢の交流と教師の工夫（さまざまなアイデア）とが，複式学級の秘められた可能性だと考えている。

今年度６月に鹿児島大学教育学部附属小学校の研究発表会，８月にフィンランドのヨキクンナンコール小学校の教育視察の機会を得た。それぞれ複式授業を行っていることもあり，両校での授業の工夫をみとり，本校複式授業に活かすことで，複式の形態を利用した研究を行いたいと考えた。

２．研究方法

本研究では，特に異年齢の交流を意図的に仕掛けることで，子どもたちに「対話」を創りださせたいと考えている。ただ，今年度担当したのが低学年なので，交流にも限界があると考えられる。

まず，授業のはじめと終わりに必ず交流を持たせることからはじめた。授業の導入やまとめの部分を共通に行うことで，異年齢の交流を常時化した。特に終わりの部分では，授業の内容に関することだけでなく，友達を認めるような発言も促し取り上げた。次に２年生が１年生に教えたり，説明したりする場面や，１年生が２年生に学習したことを発表したりする場面も持った。それができるようになってから，授業の中身でも交流につなげようと考えた。特に異年齢で同じ課題に向かえるようなことも取り入れた。本校の複式学級では，１・２年生は国語と算数で，３・４年生と５・６年生は国語・算数・理科・社会で直接間接指導による直接指導と間接指導の授業を実施している。筆者は算数を専門教科としている。そこで算数の授業での異学年の学習交流を取り入れた。

そして，鹿児島大学教育学部附属小学校とフィンランドのヨキクンナンコール小学校の教育視察から得たものを取り入れて，実践研究を行い，複式授業の有用性を示したい。

３．研究の実際

３．１．鹿児島大学教育学部附属小学校の視察

２００９年６月５日，鹿児島大学教育学部附属小学校の研究発表会を視察した。ここでは３・４年生複式の算数の授業を参観した。単元は３年生「かけ算のひっ算」４年生「１けたでわるわり算」だった。鹿児島大学教育学部附属小学校の複式授業の進め方の大きなポイントとして「ガイド学習」があげられる。「ガイド学習」は，①受動的な学習から能動的な学習態度へ変換させること，②ガイド役が毎回かわることから，全

員がリーダーとしての役割を学ぶことができること，③学習集団として組織化され，学び方を身に付けやすいことなどの理由から取り組まれていた。実際に３・４年算数の授業を見て，子どもたちが基本的なガイドの進め方をよく理解していることや，発表の話型もしっかり習得できていることがわかった。その上に黒板に１時間の学習計画が掲示されており，時間設定を行えるように工夫されていた。また授業を進めていく上で板書が手がかりになるように統一されていた。

もちろん「ガイド学習」だけではないが，随所に子どもたちだけで進められるような取り組みが見られた。そんな子どもたちだけで授業を進めることができるような工夫が数多く見られた。

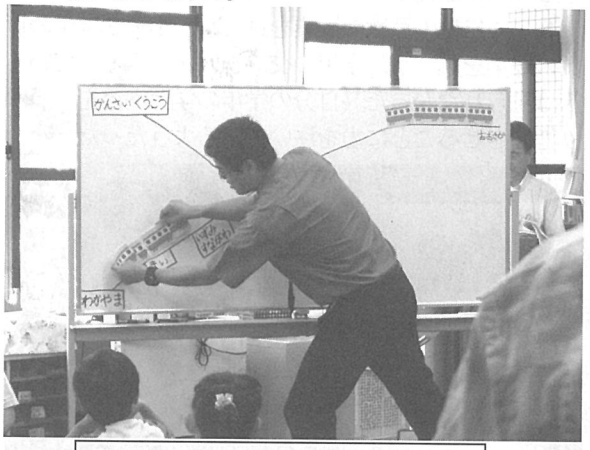
その上で，今回の授業では，３年生の「かけ算のひっ算」でも４年生の「1 けたでわるわり算」でも「位ごとに分けて考える」という同じ結論に落ち着けていた。授業の終末には，両学年の同時に授業を振り返る時間を持ち，がんばっていた友達や，今日の授業でわかったことなどが話し合われた。そのときに子どもたちが，両方の板書の「まとめ」を見て，「位ごとに分けて考える」が共通になっていることを発見した。３年生と４年生が違う学習をしていても「位ごとに分けて考える」という共通のものを発見できる，考えられた授業交流を見ることができた。

授業の終末を同時にしている場面

３．２．　複式授業研究会

２００９年6月１９日，本校で「複式授業研究会」を開催した。前述の鹿児島大学教育学部附属小学校への視察で得たものをできる限り取り入れようと考えた。ただ，それまでの積み重ねがないこと，１・２年生低学年での授業ということで，すぐには形にならなかった。「ガイド学習」とはいかないまでも，板書をもとに授業を進めていくことは数回授業に取り入れて，ある程度子どもたちも理解できていた。

授業での異年齢の交流という点では，授業の導入段階で取り入れた。問題の内容に共通のものを登場させた。今回は子どもたちが興味をもっていた電車（紀州路快速）にした。この電車のペープサートを使って導入数分間を同時に行った。１年生は車両が途中の駅で３両と５両に切り離され，そのちがいを求めるという問題に，２年生は，駅で降りる人の数に注目させて，ふえたりへったりする計算を問題に取り組むようにさせた。同時に導入することで，そこでのつぶやきや会話が，それぞれの学年を刺激し合い，興味や意識付けにつながると考えた。



両学年同時に導入をしている場面

授業の終末段階での異年齢の交流も考えていたのであるが，終末にいく前の段階で，どちらの学年も予定していたところまで進まなくなってしまい，用意していた交流をすることができなくなってしまった。それぞれの学年での授業をしっかり組み立てて，きちんと計画通りに進めることができるようになってはじめて，終末段階で交流できることがわかった。後述のフィンランドでの教育視察でも感じたことだが，それぞれの学年がしっかり授業を進められるようになってからでないと交流というふうにはもっていけないということが見えてきた。

３．３．フィンランドの教育視察

２００９年8月１７日からフィンランドの教育視察に行く機会を得た。教育省や教科書出版会社，中学校や高校などいろいろなフィンランドの教育施設を案内してくれた。とても貴重な経験をさせてもらった。その中にフィンランドでは一般的な複式の小学校も入っていた。それがヨキクンナンコール小学校だった。全校５９人で１・２年生２０人（1年生１１人2年生９人）３・４年生２１人（3年生9人4年生１２人）５・６年生１８人（5年生１１人6年生７人）という人数で，日本のように何人以下なら複式というような決まりはなく，フィンランドの単式学級と同じ２０人程度のクラスとなっていた。訪問時間が短かったこと，通訳をはさんでの会話であったこと，フィンランドの学校の学年初めの時期だったこともあってなかなかみとることが難しかったが，「複式学級では，自主性やリーダー性が育つ」という校長の話から，日ごろから筆者

が感じている心情面での良さが客観的なものになった。

実際の授業では，３・４年生の教室では，算数の授業をしていた。４年生は３年生のとき習った計算問題や文章問題を自習していた。３年生は，教師とともに学習していた。３・４年生は４人グループで活動することが多いようだった。そんな中，集中力のない男の子２人ほどが先生の机のすぐ前で学習していた。

３・４年生の算数の授業を見ても，１・２年生の算数の授業を見ても，学年の交流をはかろうとしている節は見られなかった。自分の学年の学習内容をしっかり把握させることに力を注いでいるようだった。

１・２年生の授業の様子

教室の配置を見ても，上記写真のように黒板に向かって右は１年生，左は２年生ときちんと分かれて授業をしていた。まずは学年や教科の学習内容をしっかりと習得させ，その上で両学年の交流という点では，子どもたち個人に任せて自由にさせているようであった。

３．４．研究発表会

２００９年１０月３１日に本校研究発表会が行われた。今回も授業の初めと，終わりに交流をしようと計画していたのだが，６月の複式授業研究会の授業の反省やフィンランドでの教育視察を生かして，それぞれの学年の学習をしっかり組み立て，授業の時間を大切にすることにした。異年齢の交流は，授業の終末だけにして，実践した。１年生は，「繰り下がりにあるひき算」，２年生は「かけ算」である。１年生は，考えていたよりもスムーズに進み，一人ひとりがホワイトボードに書いた意見を，自分たちで仲間わけをするという予定外の活動も入れることができた。対して２年生は，こちらが考えていたところまではいかないまでも，一人ひとりがしっかり考えられていた。どちらの学年も，それぞれの学年の学習にしっかり取り組め，考えられ，同じ学年の友達の意見もしっかり聴けていた。そして最後に異年齢の交流を授業を振り返るという形で取り入れた。

「がんばっていた友達」や「今日の授業でわかったこと」などの発表である。下のような「ふりかえりカード」を用意し，書かせた上で発表させた。

ふりかえりカード　　月　　日（　）　じかんめ	
わかったこと	
がんばっていたともだち	ともだちの　がんばっていた　ところ
なまえ（　　）	

がんばっていた友達を発表している場面

子どもたちは，「がんばっていた友達」については積極的に発表でき，特にその授業で司会をしていた子のことを「上手に進められていました。」とあげることが多かった。慣れてくると，自分の意見と違った子のことや，たくさん発表できていた子のことを見つけられるようになってきていた。しかしまだ自分の意見を言うことや，自分の学年の友達に認められたことが精一杯で，違う学年でだれががんばっていたかということには，目が向けられていなかった。

２年生のほうを向いている１年生

「今日の授業でわかったこと」に関しては，文章化することが難しいようで，「ふりかえりカード」への記入が少なかった。授業の内容自体はわかっているのだが，それを言葉に表すことができないようだった。１時間１時間の学習の内容をしっかり言葉で表現できるようになるには積み重ねが必要だと感じた。また子どもたちが発表するのをただ待つのではなく，こちらからの投げかけの言葉によってその辺りを引き出すことも必要と感じた。

４．考察

他校の実践を取り入れながら，自分の研究を進められたことは，今後の研究を進めていく上でもよい経験となった。

２校とも，それぞれの学年の学習を大切にしていることが共通であった。その上にたっての異年齢の交流ということをおもいしらされた。鹿児島大学教育学部附属小学校で行われていた「ガイド学習」のような，子どもたちが自分たちで進められるようにするための取り組みを積み上げていき，子どもたちにきちんといきわたらせることが大切だということである。

今回，低学年を担当していたということもあって，交流の難しさがあった。特に授業はじめの異年齢での交流では，子どもたちの興味や関心をつけるという目的での交流ということになってしまった。授業の終末でも，友達のがんばり，今日の授業でわかったことなど，授業の中身に深く食い込んだような交流まではできない。異年齢の授業交流の素地という点では仕方のないことなのかもしれないが，授業を進めていく力の備わっている中学年や高学年では，また違ったもっと学習内容に深くかかわったところでの交流を組織できるであろう。上学年の意見を尊重しながらも，確かめてみたくなるような問題だったり，下学年の素朴な疑問から，新たな問題が出現したりというような交流ができると，とても意義のあるものになるだろう。

また異年齢の交流を入れるためには，鹿児島大学教育学部附属小学校のような，両学年で別の学習をしているにもかかわらず，まとめが同じになるような単元を選択するというようなカリキュラムの入れ替えなども必要になってくる。複式学級の学年別指導の場合，カリキュラムを入れ替えて，同様な単元にあわせるということは行われているが，異年齢の交流という視点も入れて，カリキュラムを構成しなおすことも大切になってくるのではないだろうか。

５．成果と課題

今年度１年間，複式授業における異年齢の交流を取り入れ，鹿児島大学教育学部附属小学校や，フィンランドのヨキクンナンコール小学校を教育視察し，得られたものを取り入れて，実践研究してきた。

ただ，フィンランドのヨキクンナンコール小学校での視察で，もっと複式学級のいろいろなことについて先生たちと話し合いたかった。時間的なことや言葉の問題などがあるが，まだまだ視察の余地があった。しかし，フィンランドの教育全般に触れることができたのはとても有意義であった。そのときに，複式といえどもまずはその学年の学習を大切にしないといけないという基本に立ち返ることができた。

授業には４５分という決まった時間があり，教師がかかわる時間が半分になる複式の授業の中で，両学年のかかわり合いの素地を作るために大切な時間を使うことが有意義なのかも検討のいるところである。今後は教科の学習を主に考えながらも，複式の特質を生かせる場面でのかかわりあいを模索していきたい。

今年度は低学年の担当であったが，１年生から６年生まで６年間という長い時間で考えるならば，異年齢の交流というめざすところは，間違っていないと考える。低学年では，やはり自分のことで精一杯でまだまだ外へ目を向けることは難しい。しかし，学年が進むにつれて，子どもたちの学習への取り組みがきちんと鍛えられているとするなら，授業における異年齢の交流はたいへん効果的なものになると考えるのである。６年間という長い時間を思い描いた構想が大切であろう。

参考文献

・文部科学省「小学校学習指導要領」平成20年3月告示
・和歌山大学教育学部附属小学校　平成21年度教育研究発表会要項
・和歌山大学教育学部附属小学校　平成21年度複式授業研究会要項
・和歌山大学教育学部附属小学校紀要　第32集2009年3月
・和歌山大学教育学部附属小学校紀要　第31集2007年3月
・教師たちの挑戦―授業を創る，学びが変わる　佐藤学　2003年　小学館
・質の高い学びを創る　授業改革への挑戦　新学習指導要領を超えて　佐藤学・和歌山大学教育学部附属小学校著20009年10月　東洋館出版社
・鹿児島大学教育学部附属小学校　平成21年度公開研究会　資料他